

高 雄 谷 埴

● 編

冬樹社編集部

埴谷雄高

●編

——冬樹社編集部

冬樹社

埴谷雄高

昭和五十一年九月十二日 初版第一刷発行

著者代表 白川正芳

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二一十八

郵便番号 一〇一

電話 東京二六四—〇三四六代表

印刷 中外精版印刷株式会社

製本 凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えます。

© 1976 Printed in Japan

0095-10237-5190



④
①



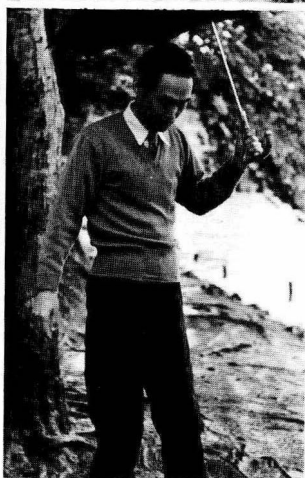
②
③



- ① 生後100日 台湾新竹にて
 ② 4歳ころ 台湾屏東にて
 ③ 5歳ころ 台湾屏東にて 近所の子供とビーフンを食べる壺谷氏（写真中央）
 ④ 小学5年ころ 台湾三崁店にて 左から母、2人おいて姉、父、壺谷氏



5
9



12

⑤ 中学1年ころ 母と台南の公園にて ⑥ 昭和3年ころ（日大時代）左から3人目

⑦ 昭和19年 自宅に防空壕を掘る 左は「構想」時代からの友人郡山氏

⑧ 昭和23年1月 東京大学にて（青柳栄次郎氏撮影）

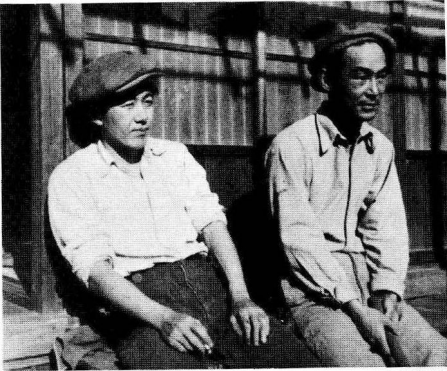
⑨ 昭和31年5月 井の頭公園にて（田沼武能氏撮影）

请访问: www.ertongbook.com

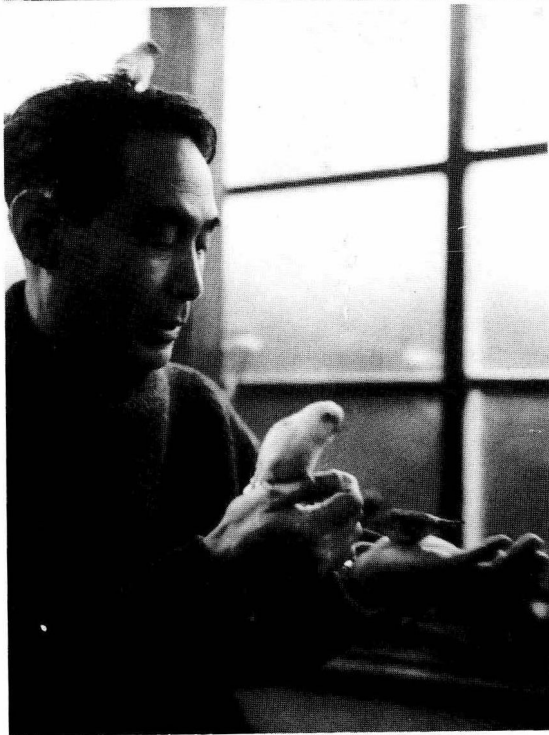


8

10



11



13



- ⑩ 昭和34年 自宅にて 小鳥たち（十姉妹、セキセイインコ、金華鳥）と
 ⑪ 『近代文学』100号刊行を記念して 左から山室、平野、壺谷、荒、本多、佐々木氏と
 ⑫ 『近代文学』『中国文学』の旅で 左から佐々木、小野、武田、竹内、壺谷、平田氏らと
 ⑬ 昭和37年 骨折して入院中の竹内好氏を見舞う（筑摩書房岡山猛氏撮影）



14



15

14 昭和44年10月『人間として』創刊 「人間として」「あさって会」の人たちと 左から柴田、高橋、真継、小田、壇谷、中村真一郎、武田、野間、堀田、原田奈翁雄、椎名

15 昭和46年5月 高橋和巳通夜の席で

16 昭和50年 「内ゲバやめよ」 6・27提言 ©朝日新聞社

アルバム

I 壇谷雄高 人と作品

戦後の出発／10 その生いたち／11 転向と戦前の仕

事／12 方法と思想／17

II 壇谷雄高 文学の世界

『死霊』入門……………本多秋五 22

永久革命者とは何か……………吉本隆明 56

ロマネスクの反語……………菅谷規矩雄 67

虚無主義の形成……………鶴見俊輔 74

『あつは』と『ぶふい』……………武田泰淳 88

壇谷雄高氏への手紙……………真継伸彦 92

「論理の忌まわしさ」について	白川 正芳	100
文体の底にあるもの	竹内 好	113
「死霊」成立の外的条件	荒 正人	115
文学上・政治論上の古典	小田切秀雄	117
埴谷雄高	堀田 善衛	119
わが友、埴谷雄高	中村真一郎	121
巨大な悪戦	山室 静	124
熱を抜いて見る人	本多秋五	127
あの頃の埴谷さん	澁澤龍彦	130
非地球的人間	北 杜夫	132
埴谷雄高氏との出会い	辻 邦生	134
「死霊」について	椎名麟三	137
文学創造の秘密		139

(座談会)

秋山 駿
森川 達也
埴谷 雄高

Ⅲ 主要作品解説

- 「死霊」／164 「虚空」／179 「不合理ゆえに吾信ず」／181
「闇のなかの黒い馬」／183 「幻視のなかの政治」／188

Ⅳ 研究資料

- 埴谷研究の展望と視点 192
埴谷雄高年譜 196
参考文献一覧 218

裝幀
三嶋典東

I
埴谷雄高
人と作品

戦後の 出発

埴谷雄高は、終戦直後、荒正人、小田切秀雄、佐々木基一、平野謙、本多秋五、山室静らとともに『近代文学』を創刊、この雑誌に連載した長篇小説「死霊」で戦後の出発をなした。第一次戦後派と呼ばれる人たちに属する作家の一人で、戦後文学を論ずる際に逸することのできない存在である。

代表作の未完の長篇小説「死霊」は、『近代文学』創刊号から昭和二十四年（一九四九）十一月まで連載されたが、作者が病気のため中絶した。その第三章までを第一巻として昭和二十三年十月、真善美社から単行本として刊行された。真善美社といえば、アプレゲール叢書として野間宏「暗い絵」中村真一郎「死の影の下に」花田清輝「復興期の精神」など戦後文学の傑作を刊行した出版社として知られている。

「死霊」は、発表当時から難解な小説だといわれ、あまりつっこんだ批評もなされないまま、一部の熱心な読者によって支持され読まれてきたが、年とともに声価が高まり、今日では作者の代表作であるばかりでなく戦後文学を代表する作品と評価されるに至っている。

第一巻が刊行されたあと、第二巻の冒頭にあたる第四章が、『近代文学』二十四年十一月号まで連載され二十五回

をもって長いあいだ中絶したままになっていて、続編が久しく待ち望まれていたが、二十年以上も経って、第五章「夢魔の世界」二七〇枚が『群像』昭和五十年七月号に発表され人々をおどろかした。文芸時評では各紙が大きくとりあげ文壇の話題をさらった。

後代の批評家吉本隆明が「埴谷雄高という名は、戦後わたしが同時代文学などみむきもしなかったところから、一種の畏怖の表情で語り伝えられた伝説的存在であった。そういう表情を人から人へはこんでゆくものに、どんな作品を書いている人なの、とたずねると、かれらは一種名状しがたい表情をうかべて『死霊』とこたえるのであった。どんなことを書いているの、とかさねてたずねると、だれもまたともにこたえずに、おそろしく難解な小説なんだと、また一種の表情をうかべるのがつねであった」（短篇集「虚空」解説）と書いているように、発表当時から種々の伝説に包まれていた。また、出版にまつわる戦後の足どり、作品の受け取られかたの変遷なども一つの伝説を作るに足るものがあったといえる。

ところで「死霊」は、戦後になってから、三十五歳の時から執筆されたが、作者の回想によると小説の原型はずっと以前、二十二歳から二十三歳にかけての約一年半を過

した豊多摩刑務所の獄中で考えられたというから、構想が立って筆を執るまでに十数年に及ぶ年月があったわけだ。最初は「惟観る人」という題が頭にあり「暴力」というものがかなり強く出されていたという。

一般的な時代の背景としては、戦後、我が国にはサルトルの「嘔吐」など、実存主義の哲学・文学が紹介され、多くの読者を得たということも考慮する必要があるだろう。

また、『近代文学』は昭和三十一年八月まで、通巻一八五号が刊行されたが、この雑誌を拠点に埴谷たちは約二十一年にわたって、戦後文学運動を推進してきた。

その生 いたち

埴谷雄高は明治四十三年（一九一〇）台湾新竹で生まれた。父の勤めの関係で台湾各地を転々とし、十二歳の時東京へ移り住んだ。当時、植民地だった台湾で幼少年時代を過ごしたことは埴谷の文学を考える際に忘れてはならないことだ。早熟で、九歳の時から『新趣味』『新青年』などの愛読者となり、推理小説を耽読、十三歳でゴンチャロフ「オブローモフ」レールモントフ「現代の英雄」ドストエフスキー「白痴」などを読み、そのころ「文学についての自覚」を持ったという。

埴谷雄高は一方で二十世紀の証人たらんとした自覚を持つ

ており、そこからあとで触れるような二十世紀文学論を根底とする文学論を展開することとなるが、これも、埴谷が台湾に育ち、日本を外側から見る環境にあったことと無縁ではないだろう。

敗戦までの経歴をたどてみると、二十世紀に突入して十年後の一九一〇年（明治四十三年）に台湾で生まれる。四歳の時第一次世界大戦が始まり、七歳でロシア革命、その後十二歳の時東京に移り住み、マルクス主義全盛時代に学生生活を送り、学内の演劇活動を経てアナキズムからマルクス主義へ移行して共産党に入党、地下生活を送る。満州事変の翌年に逮捕され、五・一五事件の日に豊多摩刑務所の未決囚の独房に入れられ、昭和八年（一九三三）に転向して出所、太平洋戦争を傍観して敗戦を迎える。

こうたどてみただけで時代の大きな渦の真ただ中にいて青春時代を過ごし戦後に突入したことがわかる。

「証人エレンブルグ」のなかで、エレンブルグが二十世紀の見事な証人となり得た最大の理由は、意識的なあるいは無意識的な、また強いられたいところの「不合格な傍観者」であったからこそ可能であったので、司馬遷のごとく「生き恥さらした」者でなければ血腥い修羅場の世界においての広汎な記録者とはなり得ないと述べているのは、埴谷が

二十世紀の証言者としての自覚を語った一例である。

転向と戦 前の仕事

「死霊」を書き出すまでの期間の主な出来事としては、さきに触れた転向体験をまずあげなければならぬ。埴谷雄高の文学・思想を考えるさいに転向の問題は避けて通ることのできない重要な問題であるのでこの前後についてややくわしくふれておきたい。

埴谷雄高は昭和七年三月に不敬罪、および治安維持法違反のかどで検挙され、豊多摩刑務所の未決囚の独房に、昭和七年五月から翌年十一月までいた。二十二歳から、二十三歳にかけての一年半である。

それまで、スチルネルの使徒たることを任じてデカダンの生活をすごし、マルキシズムの文献をアナーキズムの立場から読み、アナーキズムによってマルキシズムを批判するという試みをやっていたが、レーニンの「国家と革命」の前に屈服し、デカダンアナキストの目的完遂を共産主義の理論のなかに求めた。埴谷の思想の二本の柱、国家の消滅と存在に対する不快、の前者は、アナキストである理想家埴谷雄高の半身であり、後者は、転向者であり種々の病気の体験者である埴谷雄高のもうひとつの面である。

共産主義の理論実践の過程で検挙され、当時の共産党の

中心となっていた埴谷の所属する農民部が埴谷らの検挙により壊滅状態におちいるのだが、埴谷を待っていたのは灰色の壁に囲まれた一坪ほどの独房である。彼がこの独房へ持ちこんだ一冊の本、カントの「純粹理性批判」は彼の精神に決定的な影響をおよぼし、一つの極からそれと全く反対の極の間を往復運動しながら波のうねりのようにゆるやかにものの核心へ迫っていく独特の思考方法と文体を生み出すことになる。そして、カントによってマルクス主義は埴谷の問題のなかの一部となってしまうのである。このような転向は独自なかたちとして評価されている。彼がこの本を選んだ理由は簡単なもので、それまで主として読んでいたエンゲルス、プレハーノフ、レーニンなどのマルクス主義の文献とは関係なく、未決の独房では、歴大な哲学書がふさわしく、また語学の勉強を積極的にやろうと思ったからであった。

とりわけカントの先験的弁証論を読んで震撼したそうだが、その一節「人間の理性はその認識の一種類に於て特殊な運命をもっている——理性は斥けんと欲して斥けることができず、さればといって、それを解答することも出来ぬ問題によって悩まされるという運命をもっているのである。斥けることが出来ぬというのは問題が理性そのものの

本性によって理性に課せられたものであるからで、解答できぬというのは、それが人間の理性のあらゆる能力を超えているからである」といった理性の二律背反的命題を自身の課題とすることによって文学上の主題と方法の探求に向ったという意味でも転向体験は大きな意味を持っている。

三月に検挙され、独房に移されたのが五月十五日であるから、カントを手にするまで、三カ月の月日があるわけである。あとで、埴谷が「還元的リアリズム」と、彼の文学上の方法と立場を命名している、徹底性と厳密性をたゆみなく追求する擬視の姿勢が、このいわば空白の時間のうちに明確な形をとられて出来つつあったと考えられる。不快な存在から成立している日常的な社会的現実を全否定し、自然と対立的にとらえられた人間の精神と精神との角逐、もっといえば、灰色の壁と向き合った自身の意識の擬視が素材となるのだ。その素材を一つの核となるまで追いつめ、そこでとらえた微小の核から出発して自身の巨大な宇宙像の構成を歩一歩築きあげていくという苦しみと緊張とを伴った姿勢に向っているのである。ポオにおける或る嵐に出会った忘れたいきらめく瞬時のすばらしい夢の再生を、埴谷はもっぱら自己のみの精神を唯一の対象とし、忘れたい印象をたとえば物質の原素まで還元し、リ

アリティをもった架空の再生を試みようというのである。したがって、ポオが描いてみせた小宇宙像が、昔の快楽に満ちた美しい日々の哀感であり、それが「ユリイカ」の大宇宙の結晶となると、そこにはロマンチズムの香りが豊かに匂ってくるのだが、埴谷雄高にはもう一度みてみたいロマネスクな日々はなかった。埴谷のデカダンには、ポオが確信をもって語っている現世の幸福の根本的な四つの状態——外気中の生活と女の愛、あらゆる野望の剽奪と新しい美の創成、のなかの女の愛に寄せる夢想がまったく欠けているのが特徴であって、私の共感をよばない一点でもあるが、しかしもっと根本的には、埴谷の頭のなかには「幸福」なる言葉が存在していなかったのではないかと思われるのである。

ポオは「ユリイカ」の巻頭に、彼を理解しようとしないうアメリカ文明への抗議をこめて「私は、この本を夢を唯一の現実と信ずる人々に贈る」と書いている。ポオは夢みることができた。ポオには美に対する限りない信頼があった。そして彼は夢の裡に飛翔し「背光をもった女の像」を比類のない完璧な美しい言葉で綴ったのだった。

埴谷雄高は独房でいわば全現実を失ったのである。彼は考える対象を失くしてしまった。ポオには、最後に残った

唯一の思考対象、リアリティを強烈にもった夢があったが、埴谷雄高はリアリティをもてる何かを探し出す作業からはじめなければならなかった。その作業は自身の意識の根源をさぐりあてようとする自身の内側をのみ覗きこむ姿勢からはじめられた。

埴谷のこの姿勢に確信を与え、論理的な方法を深く掘り下げさせたのが、のりこえられて古びてしまった過去の論理学の一部としてかえりみられることのあまりなかったカントだったことは、いよいよ逆に埴谷により強い確信を抱かせたのである。

また、その頃、既に「自同律」について考えていたといわれ、これが埴谷における一つの大きなモチーフとなったことは「不合理ゆえに吾信ず」や「死霊」に明らかだ。出所後は、論理学とデモノロジー耽溺、そして埴谷は二つを一端が結びついているシャム兄弟のごとく感じ、かつて愛読したドストエフスキーを新たな場所に再発見した。

私にとってのそのときの喜びは、カントが謙虚に立ち止ったところで、ドストエフスキーが極限へ向つて奔放に飛躍していることであつて、小説という手段のなかに形而上学が逃げこみ得るし、また、カントに警

告された理性の無限の拡張を行ない得るのは、恐らく現在、小説しかないという驚くべき発見なのであつた。カントとドストエフスキー、この二人こそは、私の眼から見ると、そこに別名を仮象の論理学と呼ばれる形而上学を押しはさんで背中合せになつたシャム兄弟なのであつた。

（あまりに近代文学的な）

埴谷にとって転向後、戦後に至るまでの課題はカントとドストエフスキーをいかに結合させるかであつた。「死霊」はそのような意図のもとに書かれた小説であり、明確な方法論をもって、「観念」をきわめて大胆にしかも本格的に小説のなかに持ちこんだ実験小説である。

埴谷の有名な病氣も、重要な発想源である。小学校六年のとき重い肺炎にかかったのがはじまりで結核に四度やられている。中学時代、未決時代、戦争中、戦後と十年位の間隔をおいて再発している。そのほか、心臓病、カリエスと多様で、「洞窟」「意識」と「不合理ゆえに吾信ず」にはその痛ましい体験が織りこまれている。

「洞窟」では、意識と存在、という風にその本質的な不快、苦痛をとらえているが、作者の強い精神は、そこに一